

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530687

研究課題名(和文)グローバル化する社会における国際結婚の実証研究

研究課題名(英文)The Study on the international marriage under the globalizing society

研究代表者

山田 昌弘 (Yamada, Masahiro)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：90191337

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：国内での結婚が減少する中、海外で日本人女性と外国人男性、特にアジア人男性との結婚が増加している。その理由と実態を明らかにするため、国際結婚をしている日本人女性約79人にインテンシブなインタビュー調査を行った。グローバル化している中、海外に出ていく日本人が増えることが背景にある。そして、彼女たちの語りの中で、日本企業での女性差別体験、そして、日本人男性が恋愛に消極的であることが、繰り返し述べられた。日本社会での女性が活躍できない環境、そして、日本の不活発な恋愛状況が、女性を海外に活路をもとめさせ、そして、国際結婚を増加させる要因となっていることが推定できる。

研究成果の概要(英文)：The number of intentional marriage between Japanese woman and foreign men (especially Asian men) has been increasing even though that of domestic marriage has been decreasing. To clarify the reasons of the increase, we did intensive interview research to about 100 Japanese women who get married with Asian men live in Asia. It is sure that the increase of going to foreign countries is one reason. But in Japanese women's talks it is repeatedly told that they were discriminated in Japanese companies because of female, and that Japanese men were passive about love affair. It is concluded that the discrimination against women and the passiveness of love culture in Japan push talented women to go abroad and get marriage there.

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：国際結婚 グローバル化 アジア社会 女性差別 恋愛 香港 仕事と育児の両立

1. 研究開始当初の背景

1975年以降、日本では、未婚化が進んでいる。2010年の国勢調査の未婚率によると、25歳から29歳の男性の未婚率は71.8%、30歳から34歳の男性の未婚率は47.3%であり、25歳から29歳の女性の未婚率は60.3%、30歳から34歳の女性の未婚率は34.5%である。この数値からもわかるように、「適齢期」にある男女が未婚であることは、日本ではもはや恒常化している。

こうした流れの中で、において、国際結婚件数は1975年以降も増え続けた。特に、1990年代に至って急増し、2005年の人口動態統計によると、婚姻件数、総数714,265組のうち、夫婦ともに日本人の夫婦は672,784組、夫婦の一方が外国籍の夫婦は41,418組で、国際結婚約6%を占めるようになった。また、現在の夫婦の一方が外国籍の夫婦の総数は、25年前の昭和60年の12,181件と比べると、約3.5倍にまでに増大している。それ以上に海外での日本人の国際結婚の結婚も増大し、1985年には、2,049組だったのが、2005年には、11,885組と、約6倍になっている。数字から見ても、現在の日本の結婚あり方は国際結婚を抜きに考えることはできない。

研究代表者(山田昌弘)は、日本で深刻化する少子化の主要な要因の一つが未婚化にあることを主張し続けている。現在はこの見解が認められつつある。そして、未婚化の原因として、女性の上昇志向が強い(自分の父や自分以上の経済力をもつ男性を結婚相手として選ぶとする)こと、性役割分業意識がまだまだ根強いこと、そして、新しい経済のもとで、若年男性の経済力の格差が拡大していることを指摘し、その結果、経済力が低い男性と、上昇志向が強い女性の結婚難が生じていることを明らかにした『結婚の社会学』(1997年、丸善)『少子化社会日本』(2007年、岩波書店)。

その中で指摘してきたことが、日本での結婚の減少の反動として、国際的な経済格差を利用した国際結婚が増大しているという見解を述べてきた。それは、日本人男性の国際結婚は、外国人女性の国籍はフィリピンなど発展途上国との結婚が急増し、日本人女性と結婚する男性は、欧米諸国であることが多かったのである。つまり、日本人女性の国際結婚は欧米人と結婚することによって、社会的ステータスが上がる身分の上昇婚である。それに対し、日本人男性の国際結婚の特徴は、収入が不安定な男性、つまり日本人女性の敬遠する男性とフィリピンなど発展途上国の女性との結婚で、発展途上国の女性に日本の豊かな経済の恩恵をあたえる結婚とされてきた。つまり、発展途上国女性の国際結婚は、日本人男性と結婚すると経済的に豊かになるという経済的上昇婚が維持されていた。

そして、国際結婚を研究した先行研究、竹下修子の『国際結婚の社会学』、嘉本伊都子の『国際結婚の誕生』『国際結婚論! ? 現代

編』でも、国内でのこのパターンの結婚を中心に調査、分析がなされている。

しかし、「妻日本人・夫外国人」のカップルで、外国で結婚した女性について行われた調査はほとんどない。Karen Kelskyがアメリカに渡る日本人女性についての分析が数少ない例外であった。

しかし、このような国際結婚の研究は、グローバル化以前社会以前の国民国家体制による国家間格差から生まれた結婚形態を調査したものである。しかし、サスキア・サッセンが『グローバル・シティ』で述べているように、現在のグローバル化社会では国家間格差よりも国内化格差が大きくなる社会である。そして、アジア諸国の経済が発展し、日本が経済停滞する中で、新しい国際結婚のパターンが生まれつつあることが、国際結婚のいくつかの事例から見えてきた。

それが、高学歴日本人女性と富裕層のアジア人男性が、国外で結婚するパターンである。人口動態調査のデータで見ても、2005年をピークに日本人男性とアジア人女性の結婚が減少している。しかし、海外でアジア人男性と結婚する日本人女性は増え続けているのである。

経済がグローバル化するにつれ、特に、ビジネスや留学などでの国際移動が多くなっている。世界的にも、男性より女性の国際移動が盛んになっている(Arlie R. Hochschild and Barbara Ehrenreich 2002 'Global Women'参照)。その中で、経済的に豊かになったアジア人男性と、日本での結婚相手に恵まれない女性が出会い結婚しているというパターンが想定される。ちなみに、トルコのカッパドキア市では、トルコ人男性と結婚している日本人女性が40人以上いることが確認されている。そこで、グローバル化の指標として、そして、未婚化する日本社会の帰結としてのアジア人男性と日本人女性との結婚に注目した。

2. 研究の目的

日本人女性とアジア人男性の結婚の実態とその背景を実証的に研究する。特に、香港が典型的なケースを提供していると考えている。それは、香港の経済発展が著しく、一人あたりGDPで日本を実質的に追い越しているため、富裕な香港人男性が増えているという実態。そして、アジアのグローバル化の象徴として、欧米や日本、韓国、中国本土とのビジネス交流、語学留学等の交流が多く、日本人女性と香港人男性の出会いの機会が多いからである。現在、約800組以上の国際結婚夫婦が在住している。

更に、調査地域を拡大し、シンガポール、トルコ、タイで、現地の国際結婚夫婦を調査する、これらの国々は、香港と並んで、経済発展が著しいという特徴がある。

彼らが結婚した経緯、そして、結婚生活の実態を調査し、日本の結婚の経緯、実態と比較することによって、グローバル化の進展と共に、日本人、特に日本女性の結婚の将来について展望する。

本調査は、グローバル化という視点を取り入れることによって、日本人にとっての国際結婚の新たな展開を明らかにする所に特徴がある。特に、経済発展するアジアの富裕層男性と高学歴日本人女性の組み合わせは増えているにもかかわらず、研究がなされていない領域である。結婚の最先端の潮流を明らかにするという点で独創的であると考えられる。

予想される結果として、日本社会の雇用状況が硬直化しており、また、雇用における女性差別も残る日本で職業上の活躍場所がなく、また、彼女らの希望する結婚相手は日本にいないために、高学歴女性がアジアに活路を求め、その結果、アジア人男性と出会って結婚し、やりがいのある仕事、結婚相手、子どもを手に入れるというパターンである。そして、言語的、そして、文化的にグローバルな結婚生活を営んでいるというものである。これは、グローバル化が進展する中で、新しい結婚スタイルのモデルを提供する可能性があると考えている。

3. 研究の方法

アジア人男性と結婚してアジアに在住している日本人女性へのインテンシブな事例調査を基本とする。アジアの中でも、経済発展が著しい東アジア諸国とトルコに絞って考察する。

基本的な台帳が利用可能でないので、対象者の選定は、機縁法によった。各都市で数人のキーパーソンを見つけ出し、その人を出発点として、調査対象者を紹介してもらい、そして、その対象者に別の人を紹介してもらうというスノーボール・サンプルリングの手法を併用した。また、サンプルが偏らないように、子供がいる人、いない人、年齢など、多様な人を紹介していただくように依頼した。

それに合わせて、対象者の方に質問紙調査票を配り、それによっていくつかの基本的属性による比較ができるようにした。

面接は、半構造化面接を行った。予め、調査項目をたて、それに沿って、お話を伺った面接調査に当たり、調査目的の説明の他、社会学会準拠の調査倫理について説明し、同意の後に、インタビューを行った。インタビューは、その場で記録をとり、後に、確認のためメールで追加の質問をとったケースもある。

調査項目は以下の通りである。

* 調査シート

氏名

1. 妻の経歴

a 生年月日 年

b 年齢 歳

c 出身地

d 学歴

e 職業

f 初めていった海外

g 渡航歴

2. 妻の定位家族 = 生まれ育った家族

a 両親の職業

b 兄弟姉妹の有無 + 兄弟姉妹の結婚状況

3. 妻のライフヒストリー

どのような人生を歩まれてきたか + どのような人生観をお持ちか

職業観

人生観

恋愛観 (つきあった人数)

4. ふたりの出会い

a 何歳くらいのころ、いつ頃に

b どこで

c どのような状況で

e 第一印象

5. 結婚にいたるまで

a 恋愛から結婚にいたる過程 (結婚を決意したきっかけ。結婚を断念しようと思ったことの有無)

付き合うことにしたとき、何歳、月

日

つきあった期間

結婚したとき

b 親の反応 妻の両親

c 親の反応 夫の両親

6. 夫の経歴

a 生年月日 b 年齢 c 学歴 d 職業 e 年収 (答えていただける場合のみ)

7. 男性の定位家族

a 両親の職業 b 兄弟姉妹の有無 + 兄弟姉妹の結婚状況

8. 男性のライフヒストリー

どのような人生を歩まれてきたか + どのような人生観をお持ちか

9. 生殖家族 = 今のご自身の家族のこと

a 家族構成 b 居住形態 c 国籍 d 在住許可のありかた

10. 性役割分業の状況と家計管理

a 家事分担の状況 b 家計管理の仕方 (夫管理か、妻管理か) c メイドの有無

11. 結婚生活と言語の問題

a 国際結婚で生じている問題 b 夫婦での使用言語及び家族での使用言語

12. 子どものこと、国籍、言語、教育

a 国籍 b 現在の使用言語及び将来使用予定の言語 c 教育のありかた d 夫婦としての教育方針、同じか、違うか

以上調査項目

それに加えて、文献研究、国際結婚に関する専門家、国際結婚に関わる事業者等へのヒアリングを行った。比較のため、日本でアジア人男性と国際結婚している日本人女性への事例調査も合わせて行った。

4. 研究成果

概要

国際結婚している日本人女性計 79 名の方に、インタビュー調査を行った（そのうち、27 名の方は、2010 年以降本助成以前に予備調査としてインタビューしたものが含まれている、また、本助成による調査とは別に、インタビュー調査を続行中であるので、件数に関しては暫定的数字である）。

年齢は 29 歳から 54 歳までである。学歴は、ほとんどが大卒、短大卒であり、大学院卒も多い。同じく、彼女たちの結婚相手の男性もほとんどが大卒以上であり、欧米大学への留学経験がある男性も多く、専門職に就いているケースが多い。

本調査の分析は、継続中であるが、特徴的な 3 点（基本的属性 1 点、及び、会話分析からみえてきたもの 2 点）について、研究成果を示す。

出会いに関して

まず、グローバル化の一つの帰結が「出会い」が国際的になったことである。79 組の出会いを場所で分けると、日本 15 ケース、現地 40 ケース、第三国 23 ケース、ネット上 1 ケースとなっている。過半が、日本女性がアジアに行っている時に、現地の男性と知り合っている。また、二人が現地にいたまま、ネット上で知り合って結婚という通信手段の発達によって可能になった出会いがある。そして、後でも述べるが、二人の出身地と異なる国で、出会って結婚したというパターンが 23 ケースとかなりの割合に上ることである。

出会いのきっかけをみると、「仕事上の知り合い」18 ケース、「友人等の紹介」17 ケース「学校での出会い」16 ケース、と拮抗している。また、「ガイド（男性）と客」というケースが 9 ケース、「偶然の出会い」9 ケース、「日本語学校の先生と生徒（男性）」が 7 ケース、「ネットで知り合い」が 3 ケースであった。

うち、特徴的な出会いが、「第三国、特に欧米の大学、語学学校で出会った」というもので、全体のうち、14 ケースを占めている。日本では、男性が単独で留学することは限られているが、女性は、チャンスを求めて、様々な形で、欧米圏への留学を単独で行っている。一方、日本以外のアジアの新興国の家庭では息子を優先的に海外に留学に送ることが多い。つまり、自然と、欧米でのアジア人留学生の性比が、日本人女性、アジア人男性が多くなる。また、欧米の大学の中では、特にアジア人留学生同士での食事会が多くなり、そこで知り合い、彼の帰国と共に結婚というパ

ターンが多く見られて事である。これも、日本社会が女性の能力を生かせず、留学にチャンスを求めるという背景がもたらしたものであるといえることができる。

日本の職場における女性差別体験。

多くの女性が、結婚前に、アジアの地で働いている。そして、そのほとんどが日本で働いた経験をもっている。

日本を離れた理由を聞く中で、典型的な語りがあり、日本における仕事での不満、とりわけ、女性差別に基づく不満であった。ある人は、昇進のさせ方が男性に優位であることに不満を持ち、ある女性は女性非正規社員であるため実力が正当に評価されなかったことを強調していた。日本の職場環境が、「実力主義」ではなく、男性優位の年功序列、正社員主義であることが、女性を海外で働くプッシュ要因になっていることがわかる。

彼女らの典型的な語り「日本では今のように働けなかったらう」というものである。それには、日本企業が女性差別的であることだけでなく、日本社会が子どもを育てながら十分に働く環境にないことも言及されている。アジアの新興国、特に香港やシンガポール、バンコクでは外国人保育者を雇うことが容易なので、仕事と家庭の両立が容易であることも含まれている。

日本の恋愛の貧弱さ

彼女たちの多くは、アジア人と結婚する前に、日本人との恋愛体験をもっている。そして、彼女たちは、アジア人男性の積極性を語ると共に、日本人男性の消極性、特に、自信のなさを言及する。

彼女たちがアジアで結婚する背景の一つに、日本人男性の恋愛に対する消極性であることがあることが推察される。

まとめ

日本で結婚が減少しているのに対して、日本人女性とアジア人男性との結婚が増えている背景として、いくつかの要因があることが見えてきた。

まず、アジアの経済力上昇が背景にあるという当初の仮説は、有意抽出のインタビュー調査では、実証されたとは言い難いが、結婚相手のアジア人男性の多くが高学歴で専門職であることをみると、アジアの経済発展が富裕な独身男性を多く供給していることは間違いないと思われる。

また、日本における女性差別的慣行、企業における女性差別、両立が難しい環境が、能力がある女性を海外に向かわせ、知り合う機会を増やしているという傾向の存在を示唆している。

また、日本における男性の恋愛に対する消極化も、女性を海外での結婚に向かわせる要因の一つになっていることを示唆している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 2件)

山田昌弘「結婚難の日本人男性」
(pp.171-174)山田昌弘『なぜ日本は若者に冷酷なのか』所収(2013年東洋経済新報社)

山田昌弘・開内文乃『絶食系男子となでしこ姫 - 国際結婚の現在・過去・未来』(2012年・東洋経済新報社)(176頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 昌弘 (Yamada, Masahiro)

中央大学・文学部・教授

研究者番号: 90191337

(2) 研究協力者

()

開内文乃 (Hirakiuchi Fumino)

(中央大学・文学部・兼任講師)